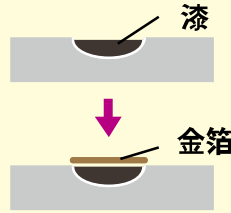




琉球漆器には主に次のような5つの技法があります。

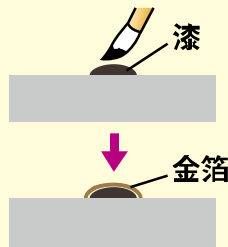
沈金

中国で14世紀ごろに考案された、漆塗りの面に文様を線彫りし、その溝の中に漆を摺りこみ、金箔や銀箔をあてて溝の中に密着させて文様を表す技法で、15世紀にはすでに琉球に伝わっていたと考えられています。



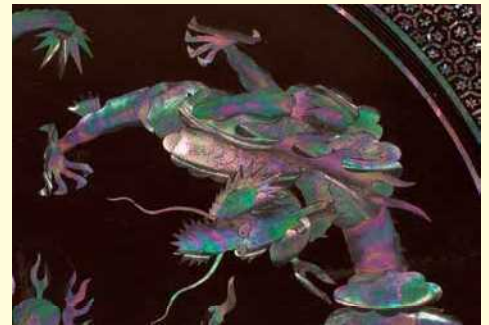
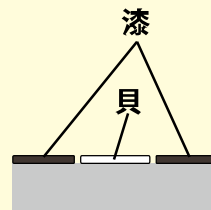
箔絵

中国で考案された、漆で文様を描いて箔を貼り、その上にぼかしや黒漆の線描、山・岩のひだなどを出したり、金箔を方形やひし形などに切ったりして幾何学文様を施した技法です。琉球には16世紀ごろにはすでに伝わっていて、高度な技法が確立されていました。



螺鈿

中国や日本・琉球・韓国・タイ・ベトナムなどアジアの地域に伝わるものです。いろいろな種類の貝殻を適当な薄さに摺り、平らにしたものを文様の形に切って漆の面や木地、金属面などにはめ込んだり貼り付けたりしたあと漆を塗って研ぎだす技法です。



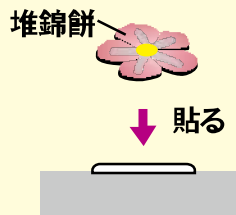
密陀絵

油に乾燥剤としての密陀僧(一酸化鉛)を加えたものに顔料を混ぜて絵や文様を描く技法です。漆の色は黒や朱・黄色・緑・褐色の5色に限られるので、より多彩な表現をしたい場合に密陀絵が使われました。



堆錦

漆にさまざまな顔料を混ぜて彩漆をつくり、金槌で打って適当な硬さの餅(堆錦餅)を作ります。これをさらに薄く延ばして型押し、刀で様々な文様の形を切り取って漆器の面に貼り付けた琉球漆器特有の加飾法です。立体的な彫刻やレリーフにも使用されています。もともと中国で用いられていた堆錦の技法に琉球で新しい工夫を加えたものと考えられています。



県指定有形文化財(昭31.12.14)

完成した時は、
すごくきれいな作品
だっただろうね。

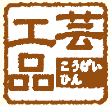


螺鈿は、中国で考案された技
法で、それを琉球で工夫して
立派な作品を生み出したんだ。
また琉球産の夜光貝は12世紀
に建てられた岩手県にある平
泉中尊寺金色堂でも使われて
いるんだ。



黒塗螺鈿 遊雁絵大文庫

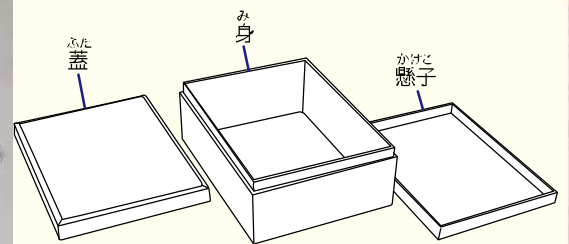
1合 高16.1cm 縦41.4cm 横31.2cm



夜光貝で描かれた水辺の風景



黒塗螺鈿遊雁絵大文庫



螺鈿とは、夜光貝やアワビの貝殻の内側にある真珠層の薄片を文様の形に切り取り、漆面に貼りつける技法で、沖縄では16世紀頃から使われてきました。この文庫には、夜光貝が用いられています。

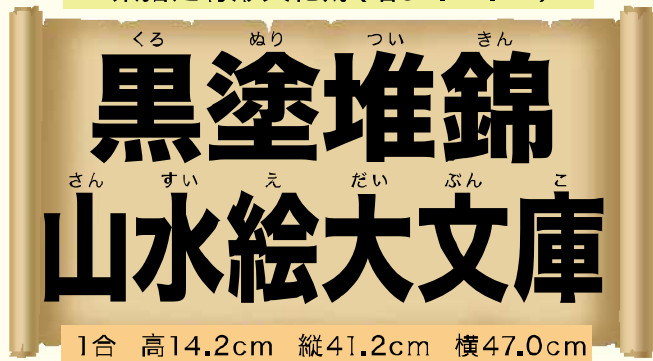
この文庫は、琉球王府時代に重要書類などを納めた手箱で、身と蓋からなり、中に懸子があります。身、蓋ともに黒塗地に螺鈿の技法を

駆使し、水辺で遊ぶ水鳥の図が巧みに描かれています。

螺鈿は、格調高く精巧で難しい技法だと言えます。材料の夜光貝は沖縄近海で採れる貝で、螺鈿独特の美しい光沢を生じることから、当時の中国や日本で重宝されました。

この作品は、文様の細かさや製作技法から貝摺奉行所で製作されたと考えられます。

県指定有形文化財(昭31.12.14)



素敵な
デザインの
大文庫ね。

堆錦を始めた記録に残る比嘉乗昌は、唐名を房弘徳とって、堆錦を開発したことで、首里王府からぼうびをもらっているんだ。他にも三名の人と一緒に芭蕉紙も共同開発しているんだよ。



琉球で発展した堆錦技法



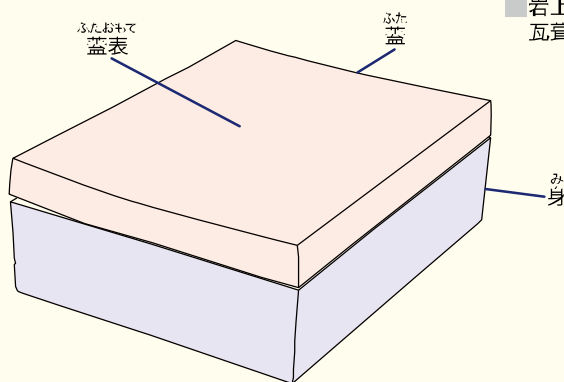
黒塗堆錦山水絵大文庫



岩上に生える樹木と瓦葺きの家屋(蓋表)

堆錦とは、漆を餅状にした堆錦餅に顔料を混ぜて、金づちで叩いて平たく延ばし、これを文様の形に切り抜いて貼りつける技法のことです。堆錦の技法は、1715(康熙54)年に比嘉乗昌によって始められたと『球陽』(1745年)に記録されていますが、「堆錦」の語が中国の漆工書にも載っていることから、中国古来の技法を琉球において改良・発展させたものと考えられます。

この文庫は身・蓋とも黒塗地に堆錦で山水画が格調高く描かれています。蓋表の前景右側には、岩上に生える樹木と、その下に瓦葺きの家屋を合わせ、側面には水上に遊ぶ水鳥が表現されています。この作品は格調高いデザインと丁寧な作りから貝摺奉行所の作品と考えられ県内に現存する堆錦の名品として貴重です。



水上を遊ぶ水鳥(側面)

県指定有形文化財(昭31.12.14)

くろ ぬり ら でん うん りゅう もん
黒塗螺鈿雲龍文
ない ぎん ぼく ふた つぎ わん
内金箔蓋付椀

1口 高12.0cm 直径12.1cm



内側が金箔って、
ものすごく
ぜいたくだね。



中国皇帝への献上品と同じレ
ベルの椀だからだろうね。
首里王府が技術の粋を集め
て作った作品なんだ。



冊封使の接待に使われた五爪の龍の琉球漆器



黒塗螺鈿雲龍文内金箔蓋付椀



黒漆面の双龍・瑞雲・火焰宝珠

蓋付きの漆塗り椀です。外側の黒漆面には夜光貝の螺鈿で、双龍、瑞雲、火焰宝珠が描かれ、内側には金箔が貼られています。夜光貝の薄片には、毛彫りや点彫り、ノミ打ちの技法が施されています。

この椀は貝摺奉行所で、冊封使の接待用とし

て特別に仕立てられたものと言われており、同種の椀が17～18世紀にかけて琉球王府から清朝に貢納されています。この螺鈿にはとても薄い貝片が用いられており、貝摺奉行所の伝統的技法を知る上で重要な作品です。

県指定有形文化財(昭31.12.14)

聞得大君御殿 雲龍黄金簪

1本 高6.8cm 直径11.1cm 棒長21.8cm



とても大きな簪だね。これを
さした聞得大君は、
とても美しかっただろうな。



聞得大君が用いただけあつ
て、おごそかな雰囲気を持
つ簪だね。大きな花は空
洞になっていて、そこに柄
を差し込む仕組みになつて
いるんだ。



琉球の金工技術の粋を集めた金の簪

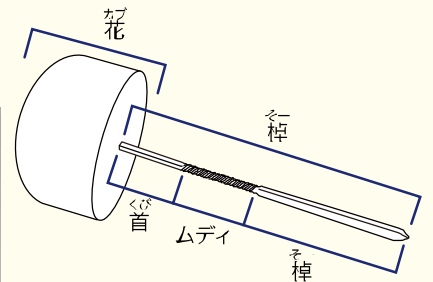


聞得大君御殿雲龍黄金簪

琉球では、身分によって付ける簪の種類が定められていました。この簪は、琉球国最高位の神女である聞得大君が用いたものです。聞得大君は普段は半月形の黄金簪をさし、重要な儀式の時にこの大簪をさしたとされています。

簪は、頭を「花」、柄を「棹(そー)」と呼びますが、棹(そー)をさらに細かく区分した場合は、花に接する六角柱の部分を「首」、その下のらせん状の部分を「ムディ」、残りの四角柱の部分を「棹(そー)」と呼びます。この簪は、金箔貼りで、花の上部に日輪(太陽)と雲、側面に雌雄の龍と波を浮き彫りで表現しており、底には雲波に雌雄の龍が描かれています。首には幾何学模様、棹には唐草文様の陰刻があります。

聞得大君の儀礼用の聖具にふさわしく、おごそかで重々しくまた、華麗な作品です。



日輪と雲(上部)



雌雄の龍(側面)



雲波と雌雄の龍(底)

あおりやえ あんじまがたま 按司曲玉

1連



今帰仁村歴史文化センターで展示されているのを見よ。

曲玉は、神女たちが祭祀の際に、首に掛けていたものだよ。神女の祭具として琉球では、古くから用いられていたんだ。



首里王府の祭祀を伝える貴重な曲玉



あおりやえ按司曲玉と水晶



あおりやえ按司曲玉



曲玉(拡大)

琉球王府時代の今帰仁の神女が祭祀に用いた曲玉です。あおりやえ(阿応理屋恵)按司とは三十三君(高級神官)の一つで、聞得大君について位の高い神女でした。

今帰仁あおりやえは、尚真王(在位:1477~1562年)の3番目の子供である尚昭威を初代とする北山監守一族の女性が受け継いだとさ

ています。国頭地方の最高神女として、今帰仁城内の御嶽の神々を祀り、五穀の祭祀を司りました。また、太祖(尚円王)にまつわる伊是名及び国頭宜名真御殿を拝むことが務めであったと伝えられています。聞得大君の曲玉が紛失していることもあり、この曲玉は当時の祭祀を知る上で貴重な資料です。

県指定有形文化財(昭53.4.1)

くろ ぬり きく か ちようちゆう ちん きん まる そと びつ

黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃及び

みどり ぬり ほう おう くも ちん きん まる うち びつ

緑塗鳳凰雲沈金丸内櫃

1連 2台 (外櫃 高24.2cm 口径25.0cm 内櫃 高16.0cm 口径20.0cm)



二重の箱に収められていた
という、とは、本当に大
きな曲玉だったんだらうね。

1500年頃に作られたと考
えられているんだ。君南
風は、あおりやえ按司と
同じく「三十三君」の一人
だとされている位だった
んだ。その人が使用していた
漆器だから丁寧に作られ
ているんだね。



尚真王から贈られた漆器の名品



黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃



蓋(黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃)



黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃



蝶(拡大)



蜂(拡大)



緑塗鳳凰雲沈金丸内櫃



蓋(緑塗鳳凰雲沈金丸内櫃)



緑塗鳳凰雲沈金丸内櫃

近世琉球の久米島には、君南風という高級神女がいました。その君南風が祭具として使用した曲玉を納めた漆塗りの丸櫃で、大きめの外櫃と小ぶりの内櫃があります。外櫃は、外側が黒漆、内側が朱漆で、七宝繋の地文に菊や蝶、蜻蛉、蜂が漆の表面に彫り込んだ文様に金粉や金箔を押し込む沈金という技法で描かれています。内櫃は、外側が緑漆、内側が朱漆で、外側には点格子を地文として、日輪や鳳凰、雲が

沈金で描かれています。

沖縄の沈金の作品としては古く、特に緑漆の内櫃は古い様式を示しています。

丸櫃に納められていた曲玉(千代の真首玉)は、尚真王による八重山のオヤケアカハチ討伐(1500(弘治13)年)に随行した君南風が、勝利に貢献した褒賞として拝領したものと伝えられています。

県指定有形文化財(昭54.9.3)



みんなお碗で
食中をしたら、
さぞかし美味しかった
だろうね。

かつての士族の美意識が
伝わる名品だね。手間をか
けて作られたんだろうね。



えだ うめ たけ
枝梅竹
もん あか え わん
文赤絵碗

1口 高7.4cm 口径14.5cm



琉球陶器の高い水準を示す赤絵の名品



枝梅竹文赤絵碗(表)



枝梅竹文赤絵碗(裏)



枝梅竹文赤絵碗(高台)

首里の上流士族が琉球で作らせた汁碗です。高台から口縁部にかけてのふくらみが、ゆったりとした風情を表し上品な形をしています。赤絵の色合いも地肌とよく調和し、温かみを感じさせます。白土化粧の上に梅枝文(表)と竹文(裏)が巧みに描かれており、現存する赤絵陶器の中の逸品です。琉球の赤絵技法は、1670(康熙9)

年に王府の命を受けて平田典通が中国に渡り、そこで3年間陶法を学んで帰国した際に伝えられたと言われます。琉球の赤絵は、細部にこだわらず、おおらかな文様を表現するのが特徴です。

この作品は個人の愛蔵品でしたが、沖縄戦後に沖縄県立博物館が購入しました。

県指定有形文化財(昭54.9.3)

せん ほり そめ つけ
線彫染付
ぎよ もん さら
魚文皿

1口 高5.4cm 口径24.8cm



わあー、本当に魚が飛び跳ねているみたい。



魚文は、今でも沖縄の陶器にデザインされている、琉球のオリジナルなんだよ。沖縄で初めて人間国宝に認定された金城次郎さんは、この作品を手本に魚文を描いたと言われているよ。



元祖、魚文皿



■ 高台



■ 線彫染付魚文皿

りゅうきゅう めいこう なかんだかり ちげん
琉球の名工・仲村渠致元(1696~1754年)
の作品と伝えられる18世紀の陶器です。

白がけの地に鋭い線彫りで、魚と波、水鳥をさりげない表現ながら巧みに描き、その上に呉須釉を施しています。魚が今にでも飛び出してきたような描写の文様がよく調和した、線彫り作品中の名品です。

なかんだかり ちげん いげみぎま なほ いげみぎま
仲村渠致元は、泉崎村(現在の那覇市泉崎)にある陶工の家系に生まれました。1724(雍正2)年に王府の命により八重山へ行き、4年間滞在して陶法を伝授しました。また、1730(雍正8)年には薩摩に派遣され、技術を磨いてき

ました。

この作品は尚家(王家)の所蔵でしたが、尚典から尚旦へ譲渡され、さらに歴史学者である東恩納寛惇氏に贈られたのち、1958(昭和33)年に沖縄県立博物館に寄贈されたものです。

県指定有形文化財(昭54.9.3)

いろ そろ がん あわ え
色象嵌粟絵
ぎっ か ざら
菊花皿

1口 高4.4cm 口径22.8cm



子孫の^{みな}が
大事に守ってきた
陶器^{なん}だね。

仲村渠致元は、唐名を用
啓基。那覇の泉崎に生ま
れた陶工だよ。八重山で
陶器の技法を伝えたり、薩
摩八作陶の研修に行った
人物でもあるんだ。



名工・仲村渠致元の技法を今に伝える皿



高台

色象嵌粟絵菊花皿

琉球王国時代の名工・仲村渠致元(1696～1754年)の作品として代々子孫に伝えられてきた陶器です。

この皿は菊の花を想起させる37枚の花弁で周囲が縁取られており、線彫りをした後に黒土で象嵌をし、緑釉を差す技法が用いられています。また、見込には線彫り象嵌の手法で粟の穂と葉が描かれています。

花弁の成形、粟絵の筆使い、地肌と粟絵の発色など、いずれも名工・致元の名にふさわしい出来ばえです。

この作品は、沖縄戦以前に東京の啓明会とい



う団体が致元の子孫から買い取りました。さらに戦後、沖縄県立博物館により購入されました。

県指定有形文化財(昭54.9.3)

象嵌色差面取 抱瓶

1口 高11.8cm 幅径17.5cm



面白い形を
しているね。

二日月形になっているのが特徴で、琉球独特の形なんだ。両側の耳に紐を通して、肩に掛けて持ち運べるようになっていたんだ。壺屋で作られたと考えられているよ。



多彩な技法が駆使された琉球陶器の名品



象嵌色差面取抱瓶



裏面



底

抱瓶とは、携帯用の泡盛の酒器のことで、上部先端に注口、上部中央に口、外面左右の耳に紐を通して持ち運び出来るようになっています。形は、三日月型と面取型があり、技法も、線彫り、象嵌、染付け、流釉など多彩で、陶工たちが技を競って作った名品が多くあります。

この作品は、面取型で薄手に出来ています。

網代文様を象嵌で表し、正面は緑釉色差しで表現されていますが、生地の白と面取の器形によく調和しています。沖縄戦以前から、名品として知られた琉球産の陶器です。戦争中は、所有者が本土疎開に伴い大切に持ち歩き、戦後に沖縄県立博物館が購入したものです。



こんな大きな机に、螺鈿細工を施すって、大変だっただろうね。

実用性よりも、装飾性に重きを置いた作品と考えられるんだ。形も洗練されていて、螺鈿細工の良さをより一層引き立てているね。



黒漆山水楼閣 人物螺鈿机

1基 高24.0cm 縦39.5cm 横100.5cm



技術の粋を集めた最高峰の螺鈿の机



黒漆山水楼閣人物螺鈿机



山水図が緻密な螺鈿であしらわれている(天板表面)



花文様が螺鈿であしらわれている(天板裏面)

天板の両端に筆返しがあり、平足部にくり窓のついた螺鈿机です。全面に螺鈿の技法を駆使して山水、楼閣、人物の様子が施されています。表面は、上からのぞいたような鳥瞰的な構図で、縦線と横線によって、風景を大きくみせる工夫がされています。裏面の中央と四隅には互いに異なる花を配しています。夜光貝が黒漆の上に鮮やかに輝き、見る角度によって七色

に変化します。

絵の中の人物や草木、花などがリアルに表現されており、高度な技法がみられることから、17世紀頃の貝摺奉行所で製作された作品と推定されています。

琉球漆器のみならず、わが国の漆芸史の上でも重要な工芸品です。